

スオサンアール 私と鎖三兒の年代記

羅 永 常

(訳 富永涓子)

私と鎖三兒は牛蹄凸^{ニウティーツー}の村で、同年同月、日はちがうが同じ庚^{こう}の日①に生まれた。私たちは小さい時から、まるで一对の離れない油と塩の缶のように一緒に遊びころげていた。

4才のあの年、運命はどうしても鎖三兒を困らせることにした。彼の若くて元気な父は一度の不発砲弾処理の事故で命を落とし、間もなく、あのきれいな母は再婚し、彼は年取った祖父のところに放り出され、ほとんど食べるのにも困った。しかし私は、父が村の幹部で、母は村の教師で、小さい時から衣食には困らず、良い教育を受けていた。

6才のあの年、私と鎖三兒は一緒に小学校に入った。母は私を身ぎれいにきちんと整え、その上私は唐宋の詞句三百首をすっかり覚え、千までの数の足し算、引き算が出来、

話し方ははっきりとして、考えは敏捷で、先生は私の頭を軽くたたいて笑いながら母に「この子はこれから必ず見込みがある」と言った。鎖三兒といえば、頭から足まで汚れていて、先生が彼に何を聞いても知らぬ存ぜぬの一点張りで、表情はぼんやりとしていて、ひと言も出ない。先生は眉がしらに、みるみる皺をよせた。

11才のあの年、私の作文『一人の良い学生』が省の小学生作文大会で受賞し、

先生は私を連れて省の省都へ受賞式に行き、又ご褒美として動物園と海底パークで遊ばせてくれた。

丁度その日、鎖三兒は先生が外出している間に校舎を抜け出して、あるバルブ工場の壁を乗り越えて入り、廃棄された銅や鉄を盗み、その場で警備員に捕まえられてさんざん殴られていた。

13才のあの年、私の父は文苑ホテルで私のために、中学生の数学オリンピックで大賞をとった喜びの祝宴を開いた。この時、鎖三兒のあの年をとった祖父は一人の同級生の親の前にひざまずき、彼のあのわからずやの孫の許しを乞うていた、というのは、鎖三兒がグループのけんかで、この同級生の脛を六針も縫う怪我をさせたためだった。

14才のあの年、女の子は早熟のようで、ミス・キャンバスの白雲朶バイユントゥオがこっそりと私にラブレターを手渡し、それを読んだ私は顔が火のようにほてり、心は幸せ一杯でウキウキとした。しかし心にもなく「私たちはまだ年少で、今は丁度勉強をする時期だ」と彼女に忠告した。彼女は恥しがって顔をまるで桃の花弁のように赤くした。鎖三兒といったら身の程知らずにも大胆に白雲朶に手紙を渡し、彼女はそれを無視し、「いやらしいガマ！」と白目で彼を睨み、その場で手紙を先生に渡した。校長先生はその下手くそだけど人を厭な気にさせる手紙を見て、すっかり怒りを爆発させ、きっぱりと「一人の悪が全体に影響を及ぼす」と言い、鎖三兒は校門の外へ追い出された。

19才のあの年、私と白雲朶は同じ大学に入り、私は級長と学生会の議長に選ばれ、白雲朶と恋仲になった。まさにお似合いで、甘く、熱く、とろけるようだった。鎖三兒といえば、まず安い衣服や密輸の電子時計のブローカー、その後なんと工事を請け負いだした。当然のこと、彼が請け負うのはただ、便所、肥溜め、

煙突などの汚い、危険な修理や維持の仕事だった。

25才で私は大学を卒業し、卒業証書と個人の履歴書を持ってひんぱんに個人の人材市場で一生懸命に自分をセールスした。白雲朶は、私が一杯のビーフンすら買うお金が無いほどの貧しいのを見て、しょんぼりと私から離れて行った。金銭は基で、お金が無くなってしまえば、どんな愛情も価値がなくなってしまうのだ！

同年7月、私は夕刊誌上で、金鎖不動産という会社が役員を一人募集している記事を見つけた。一人の募集に応募する人数は多い、私はもともと大きな希望は抱いていないが、やはり最後に一寸試してみようと思って行った。そのホールに踏み込むと一人の太って大柄な若者がちょうど得意気にあちらこちらへと指示しているのが見え、思わず目の前がちらついた。彼は小さい時あの私とくっついてたヤツではないだろうか？ 鎖三兒スオサンアールのあのぜいたくであか抜けた様子は見違えるようだ！ 私は急いで駆け寄り彼の手をしっかりと掴んだ、まるで溺れた人が救いの一本の草を掴むように。そして繰り返し叫んだ。「鎖……いや、いや、鄧……鄧社長！」ドン「林子、君が今呼んだのはあだ名だよ、懐かしいな！」彼は私を何度もよく見て言った。「もし厭でなければ金鎖会社に来て一緒に働こうよ！」こうして私は金鎖不動産の重役の一人になった。鎖三兒は私によくしてくれ、五千元の月給を払った。その後、白雲朶は私と離れた後、すぐ悄然として彼に身を寄せていったということを知った。彼は「友達の妻は奪えない！」と言い、彼女は会わせる顔も再び私の元に戻ることも無く恥しさを受けて深圳へ……。

27才の春、私は隆盛をきわめる鎖三兒に向かっていると恥しさでいたたまれなくなり、又侮辱的な援助が劣等感となり、時には苦しめられ、仕事を始めても全くのらないため、きっぱりと辞職をした。その後半年仕事を探し、さんざんな

目に遭うばかりだった。人が世の中で生きていくには食べて、着なければならぬ。やむを得ず、まず乳児の粉ミルクや高山雲霧茶のセールスをした。メラミン事件^②の後はシャンプー、ポマード類の日用品に変えてセールスをするしかなく、最低生活の必要を満たすために、一日中輪タクで足をふんばり町中を駆けまわった。一方懐を膨らませた鎖三兒^{スオサンアール}といえば、なんと慈善事業をはじめ、貧困学生の援助、孤独な老人への年始回り、その上気前よく金を出し学校を支援するなど、たちまち民営企業家の模範となって、省の協力委員に推され、今期の政経常任委員に就いた。そしてBMWに乗り、いつも党政の首脳機関や高級娯楽所へ出入りをしていった。

30才の秋、故郷の中学校で創立記念日がおこなわれた。私と鎖三兒は招待を受けた。私は目立たない隅っこに配置され、彼はといえば省長、校長の案内で、主席台の前列に座り、昂然と胸を張り、得意満面の表情だった。彼はその場で、故郷の教育事業を支持するために、百萬元を寄付したのだ！ 即座に会場全体に歓声が響き渡った。

一人の親父が檀上の鎖三兒を指差して孫に言い聞かせた。「君はあのおじさんを見習うべきだ、裸一貫で起業し、

富を得る一方、われわれの学校も助けてもらっている。」続いて又隅で縮まっている私を指差し、「あんなに多くを学んだのに自分一人さえ養えない、あの人の真似は決してしないように。」

運命の奴メ！ 私は檀上で意満面有頂天になっている鎖三兒を見て、「お前、大得意になるなよ。フン、三十過ぎたばかりでは我々の運命がこれから又どうひっくりかえるか、なんとも言えないよ」と心の中で憎憎しげに罵った。

① 庚……中国の干支（えと）による紀日法から生まれた日の呼び方。ひと月を3分割して旬（10日）というサイクルができ、十干が3回繰り返されてひと月になる。「庚」の日はひと月に3回訪れることになる。十二支と組み合わせられた日付が暦には書かれている。

② メラミン事件……2008年9月、粉ミルクにメラミンが混入され、5万4千人以上の乳幼児が腎臓結石の被害を受け、少なくとも4人が死亡した。

（『中国微型小説排行榜 2012年』百花洲文芸出版社，南昌市，2013，pp. 144-146.）



（中国語原文）

我和锁三儿的编年史

罗永常

我和锁三儿出生在牛蹄凸，是同年同月不同日的同庚。我们打小在一起玩耍，就如一对不脱坨的油盐罐儿。

4岁那年，老天爷非要和锁三儿过不去：他年轻力壮的爹在一次排除哑炮的事故中丢了命，不久，他那漂亮的妈妈又改嫁他人，把他扔给年迈的爷爷，锁三儿基本上是吃了上顿愁下顿。而我，爸爸是乡里的干部，妈妈是乡村教师，从小衣食无忧，受到良好教育。

6岁那年我和锁三儿一起入小学。妈妈把我打扮得干净整洁，而且能熟背唐宋诗词三百首，会做一千以内的加减法，口齿清晰，思维敏捷，老师拍着我的头笑着对妈妈说：“这伢子今后肯定有出息。”锁三儿呢，从头到脚脏兮兮的，老师提问他是一问三摇头，神情木然，语无伦次。老师的眉头，看着看着就皱了起来。

11岁那年，我的作文《一个好学生》在全省小学生作文大赛中获奖，老师陪我上省城领奖，还奖励我游览了动物园和海底世界。也就在那一天，锁三儿趁老师外出逃了学，翻墙进入某阀门厂偷窃铜废铁，当场被抓，挨了保安一顿饱揍。

13岁那年，我爸在文苑宾馆为我设宴，庆贺我在中学生奥数比赛中喜获大奖。此时，锁三儿那年迈的爷爷，却正跪在一位同学的家长面前，乞求饶恕他那年幼不懂事的孙子——因锁三儿打群架，把这位同学的左眼脸打伤，

缝了6针。

14岁那年，或许是女生早熟吧，校花白云朵悄悄地给我递情书，读得我脸上火辣辣的，心里甜滋滋的。但我还是口不对心地劝她：“我们还小，正是学习的大好时光咧。”羞得白云朵脸蛋儿红得如桃花瓣儿。锁三儿却狗胆包天地给白云朵递条子，白云朵毫不客气地送两个卫生球：“讨厌的癞蛤蟆！”当场把纸条交给了老师。校长看了那狗屁不通却又令人肉麻的纸条，简直气炸了肺，很坚决地说：“别让一粒老鼠屎搅坏一锅汤！”于是，锁三儿被赶出了校门。

19岁那年，我和白云朵考上了同一所大学。我被选为班长、学生会主席，和白云朵谈上了恋爱。真是才子配佳人，花前月下，情深深，意浓浓啊。锁三儿呢，先是倒腾廉价衣服、走私电子表，后来竟然承包起工程来了。当然，他承包的尽是一些维修厕所、粪池、烟囱一类没人干的脏活儿、险活儿。

25岁我大学毕业，揣着文凭和个人简历，穿梭于各个人才市场拼命地推销自己。白云朵我穷得连买碗米线的钱都没有，便悄悄离我而去。金钱是基础，没有金钱，什么狗屁爱情都没有！

同年七月，我从晚报上发现一则消息，金锁房地产公司招聘一名高管。僧多粥少，我本不抱多大希望，但最后抱着试试的心态，还是去了。当我跨进大厅，见一肥头阔耳的胖家伙正在那儿指指戳戳，我眼前不禁陡地一亮：他不是小时候和咱连体的那只油盐罐儿吗？锁三儿那阔绰潇洒的劲儿给人一种脱胎换骨的感觉！我急忙奔过去，紧紧攥住他的手——就像溺水之人抓住了一根救命稻草，迭声道：“锁……不、不、邓……邓总！“林子，你就叫咱小名吧，还亲切些呢。”锁三儿望着我看了又看，便说：“如果林子不嫌弃，就来金锁公司咱们一起干吧！”就这样，我成了金锁的一名高管。锁三儿对我不薄，给我开了5000的月薪。后来我才知道，白云朵离开我后，就悄然投奔锁三儿来了。锁三儿还算仗义，说，“朋友之妻不可夺！”白云朵没脸在回到我身边，蒙羞去了深圳……

27岁春，由于我面对兴旺发达的锁三儿无地自容，嗟来之食的自卑感时不时地折磨着我，工作起来也挺别扭，所以我毅然辞职。之后，找了半年的工作，几乎碰得头破血流。人活在世上总要吃饭穿衣吧。出于万般无奈，我先是推销婴儿奶粉和高山云雾茶。三聚氰胺事件后，我只好改行推销洗发水、洗发膏之类的日用品，为满足最低的生活需求，成天蹬着破三轮满大街疯跑。

而腰包鼓了的锁三儿呢，竟然行起了善事，资助贫困学生呀，给孤寡老人拜年呀，慷慨解囊支援办学呀，很快成为民营企业家的楷模，被推为省政协委员，本届政协又安排他做了常委。于是，他开着香车宝马，经常出入党政首脑机关和高档娱乐场所。

30岁秋，家乡的中学举办校庆。我和锁三儿应邀回校。我被安排在一个极不显眼的角落里，锁三儿却在县长、校长的陪同下，端坐在主席台前排，昂首挺胸，神气活现。他当场表态：为支持家乡的教育事业，捐款一百万！一时，台上台下欢声雷动。

一位大爷指着台上的锁三儿教育小孙子说：“你要向台上那位伯伯学习，白手起家，富甲一方，连咱们学校都跟着沾光咧。”继而，又指着蜷缩在角落里的我，“千万莫学那个人，读了那么多的书，连自己都养不活。”

这狗日的命运！我望着台上志得意满的锁三儿，心里在恶狠狠地骂：你别太得意，哼，说不定一过三十咱也会时来运转呢！

